

県北地域における鶏伝染性喉頭気管炎の続発事例

岩手県中央家畜保健衛生所

鶏伝染性喉頭気管炎(ILT)は、ILT ウイルス(ILTV)の感染により、鶏が開口呼吸、血痰の喀出等を示す届出伝染病で、重症例では気道狭窄により窒息死し、死亡率は10~20%と高いです。本病は、ワクチン接種による予防が有効であり、近年は西日本での散発的な発生に留まっています。

令和4年9月、本県では38年ぶり(初発は1984年の採卵鶏農場)に県北地域の採卵育成農場で本病が発生し、それ以降、近隣の養鶏場で続発(採卵鶏1件、肉用鶏2件)しています。近年、本病に対する警戒が薄れ、ワクチンを使用しない農場が多いこと及び飼養衛生管理が不十分であることが、これらの発生の背景にあると考えられ、今後、さらに続発が懸念されることから、農場への注意喚起が必要です。

1 発生状況

令和4年9月、県北地域において約23万羽を飼養する採卵育成農場の12棟中1棟で、88日齢の育成鶏が開口呼吸を示し衰弱、死亡羽数が増加したため、同日、病性鑑定を実施しました。発生農場ではILT生ワクチンを使用していましたが、発症鶏群のみ未接種でした。発生後の緊急ワクチン接種(点眼)により、発生から約2週間後に本病は沈静化しました。その後、当該農場から10km以内の周辺農場で3件の続発(10月:肉用鶏・55日齢、11月:採卵鶏・445日齢、肉用鶏・41日齢)がみられ、いずれもワクチンは未接種でした。

2 検査成績

各事例で5~12羽を病性鑑定に供しました。4事例に共通して、気管に血痰及び粘液の貯留がみられました(図1)。4例目の肉用鶏では、喉頭におけるチーズ様物の貯留が顕著でした(図2)。組織学的に喉頭、気管、肺に核内封入体を伴う粘膜上皮細胞の合胞体が認められました(図3)。ウイルス検査により、発症鶏及び死亡鶏の全羽の気管からILTV遺伝子が検出され、複数羽からILTVが分離されました。分離されたILTVは遺伝子解析により、ワクチン株と近縁の野外株であることが分かりました。以上から、本事例をILTと診断しました。

3 考察・予防

初発の採卵育成農場では、一部の鶏群にワクチン接種を実施しなかったことが、発生要因と考えられました。4事例から分離されたILTVの遺伝子解析の結果、全て近縁の株であり、何らかの要因(野生動物等)で病原体が拡散したものと考えられました。ILTVの伝播は接触感染が主体とされ、発生地域におけるILTV量の増加により、他農場へのILTV侵入リスクが高まっていることから、今後一層の侵入防止対策が必要です。本病の予防や被害軽減にはワクチン接種が有効ですが、密飼や暑熱ストレスによる免疫低下、ワクチン不適切な投与(点眼・点鼻以外)等がその発生要因として考えられています。また、本病が発生した農場ではウイルスが常在化しやすく、自然感染耐過鶏で1年以上経過後にウイルスが証明された報告もあります。以上のことから、ILTの予防には、ワクチンを適切な投与方法で継続的に接種することに加え、鶏舎毎の作業着・長靴の交換の徹底、鶏舎内外の消毒、死鳥置場及び堆肥置場等の消毒、ネット・金網等の設置による野生動物対策が重要です。



図1 気管の血痰

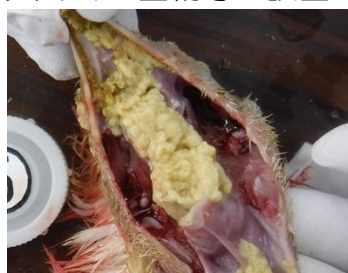


図2 喉頭にチーズ様物貯留

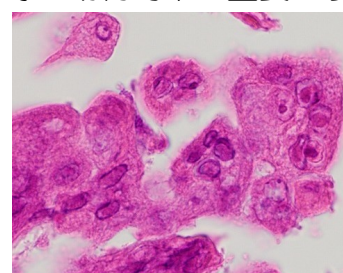


図3 喉頭粘膜の合胞体